

2. 公会堂が建つまでのこと

そもそも名古屋市公会堂はなぜ建てられたのでしょうか？ 答えは昭和天皇のご成婚記念事業です。名古屋市では多数の記念事業案の中から候補を4つに絞り込みました。それは大運動場の建設、博物館の設置、育英資金の創設、そして公会堂の建設です。その後、議論を重ねた末、1924年(大正13年)1月に公会堂の建設が決定しました。

ちなみに、昭和天皇のご成婚記念事業として建設された公会堂は全国で他にもあり、岩手県公会堂や鹿児島市公会堂(現・中央公民館)もこの頃(共に1927年/昭和2年)に完成しています。

戦前の建築で現在も集会施設として使われている公会堂は、上述の岩手県、鹿児島市の他に群馬会館(1930年/昭和5年)・日比谷公会堂(1929年/昭和4年、休館中)・大阪市中央公会堂(1918年/大正7年)・横浜市開港記念会館(1917年/大正6年)・神戸市立御影公会堂(1933年/昭和8年)・豊橋市公会堂(1931年/昭和6年)など全国に10館程度しか残っていません。さらに古い明治時代の公会堂では函館区公会堂(1910年/明治43年)のような木造建築もわずかに残っています。



日比谷公会堂



大阪市中央公会堂

ここで、公会堂そのものの歴史を紐解いてみましょう。「公会」という語が初めて使われた明治初期、その意味は国会や議会で、公会堂は議事堂や演説会場を指していました。福沢諭吉が建てた明治會堂(1875年/明治8年)などが代表例です。明治中期以降は、皇族のための迎賓館、また商工業者などの倶楽部の性格を持つ公会堂が建てられました。後者では産業振興のための物産陳列場が併設されることもありました。このかたちでの現存の施設としては岡崎市の旧額田郡公会堂及物産陳列所(1913年/大正2年)があります。



旧額田郡公会堂及物産陳列所

その後、大正から昭和初期にかけ、地方自治の場として地域住民の集会施設が求められ、全国各地で多くの公会堂が建設されました。いずれも大集会室(ホール)、小集会室(会議室)、食堂、貴賓室、娛樂室を備え、それ以前の公会堂の成り立ちである会議場・迎賓館・倶楽部の要素を残していることが共通の特徴です。その中でも、日比谷公会堂と名古屋市公会堂は、ホール席数が2,700余と最大規模でした。

ところで、名古屋市公会堂を建設するにあたっては、寄付の力も大きかったことをご存知でしょうか。当時の公会堂は篤志家の寄付で建てられることがあり、例えば日比谷公会堂では安田財閥創始者の安田善次郎、大阪市中央公会堂は北浜の株式仲買人・岩本栄之助、神戸市御影公会堂は白鶴酒造社長の嘉納治兵衛といった全国的にも著名な財界人が寄付をしています。一方、名古屋では昭和恐慌前夜という時期でしたが、地元企業に限らず、子どもたちもお小遣いから寄付するなど多くの市民も関わったのが特徴で、寄付の総件数は2,460件にも上ったそうです。